荷風全集

第四卷

荷風全集

第四卷

昭和二十三年十二月二十日　初版發行
昭和二十九年　五　月二十五日　再版發行

荷風全集　第四卷
定價參百八拾圓

著作者　永井壯吉
東京都千代田區丸ノ内二丁目二番地

發行者　栗本和夫
東京都品川區大井寺下町一四三〇番地

印刷者　曾根盛事
東京都品川區大井寺下町一四三〇番地

印刷所　扶桑印刷株式會社

發行所　中央公論社
東京都千代田區丸ノ内二丁目二番地
丸ノ内ビルディング五九二區
電話和田倉（20）一一二一―二五番
振替口座東京三四番

目次

ふらんす物語　一
船と車　二
ローン河のほとり　三
秋のちまた　四
蛇つかひ　六
晩餐　八
祭の夜がたり　一三
霧の夜

おもかげ　一三一
再會　一四九
ひとり旅　一六七
雲　一七九
巴里のわかれ　二三一
黄昏の地中海　二五三
ポートセット　二六五
新嘉坡の數時間　二七九
西班牙料理　二九一
橡の落葉　二九七
序　二九九

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

墓詣　二〇一
休茶屋　二一〇
裸美人　二一三
戀人　二一八
夜半の舞蹈　二二三
美味　二二〇
ひるすぎ　二二二
舞姫　二二四
モートバサンの石像を拜す　二二九
歌劇フォーストを聽くの記　二四七

船と車

紐育を出帆して丁度一週間目、夜の十時半に初めて佛蘭西のル、アーヴル港に着した。

自分は船客一同と共に、晩餐後は八時半頃から甲板に出て、次第に暮れかける水平線の彼方はるかに星かと見ゆる燈火をば、あれがル、アーヴルの港だと云つて打眺めて居たのである。

海は極く靜に空は晴れてゐた。しかも陸地へ近きながら、氣候は七月の末だと云ふのに、霧や雨で非常に寒かつた大西洋の沖合とまだ少しも變りはない。自分は航海中着て居た薄地の外套をばまだ脱がずに居た。

見渡す海原の彼方此方には三本檣の大きな漁船が往來して居る。無數の信天翁が消え行く黄昏の光の中に木葉の如く飛交ふ。遠い沖合には汽船の黑烟が一筋二筋と、長く尾を引いて漂つて居るのが見える——何うしても陸地へ近いて來たと云ふ氣がすると同時に、海の水までが非常に優しく人馴れて來たやうに見え初めた。

かの遠くの燈火は此の愉快な心地の彌増すにつれ、夜の次第に暗くなるに從ひ、一ツ一ツふえて來て、遂にあれが燈臺、あれが街の灯と云ふ區別さへが付く樣になつた。ル、アーヴルの市街は山手に近いと見えて燈火が高い處まで散點してゐる。其の高い山の上からは忽然銳い探海燈の光が輝き出した。

自分は云ふまでもなくモーパツサンの著作――情熱、La Passion, 叔父ジュール、Mon oncle Jules 又は兄弟 Pierre et Jean なぞ云ふ小說中に現れて居る此の港の叙景を思ひ浮べて、大家の文章と實際の景色とを比べて見たいと一心に四邊を見廻して居たのである。

然し夜の爲めであつたか自分は遺憾ながらもそれかと思ふやうな景色には一ツも出會はぬ中に、船は早や海岸に近く進んで來た。岸は一帶に堅固な石堤で、其の上は廣い大通になつて居るらしく、規則正しく間を置いて、一列の街燈が見事に續いて居る。この光を受けて海邊の人家が夜の中に靜に照出されて居る樣子は、遠くから見るとまるで芝居の書割としか思はれぬ。（久しく屋根のない眞四角な紐育の高い建物ばかり見て居た眼には、佛蘭西の人家が如何にも自然に、美しく、小い處から、一際畫のやうに思はれるのである。）

船は非常に速力を弱めながら二三度續けて汽笛を鳴らす。長い反響が市街から山手の方へと進んで行つた。海邊から人の叫ぶ聲が聞える。續いて舞踏の音樂が波の上を渡つて來る……。最う何も彼も明かに見え初めた。海岸通りには夏の夜を涼みにと男や女が散歩して居り、飲食店らしい店の戸口には美しい灯が見え、其の中にも一軒際立つて水の上にと突出て居る大な家の中では、眩い電燈の下で人が大勢踊つて居る。「しやれた處にカジノがある」と自分の傍に立つて居る男が獨言を云つた。

石堤の下には小形の蒸汽船が幾艘も繫いであり、又少し離れた水の上には大きな汽船が浮いて居るので、自分の乘つて居る船も其の邊の岸に碇を下す事だと思つて居たが船は石堤に添ひながら猶靜に進んで行く。岸の上に遊んで居る子供や娘が甲板からハンケチを振つて人の呼ぶ聲に應じて、同じ樣に叫びながら一生懸命に船を追かけて堤の上を馳つて居る。然し、船は遲いやうでも非常に早い。何時か岸傳ひにもう街端れらしい處へ來た。人家は次第に少くなつて、岸には石造の倉庫が幾棟と立ちつゞき、わが乘る汽船と同じ樣な汽船が二三艘向うの波止場に横付けにされて居る。卽、トランスアトランチツク會社のドツクに入つたのである。船が初めて進行を止

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

めるや否や水夫が勇しく聲をかけて船梯子を下した。梯子の向うは直に汽車のステーションで、甲板からも見えるやうな處に、

TRAIN SPECIAL POUR PARIS
7 H 55, A. M.

巴里行特別列車午前七時五十五分發と大きく掲示してある。甲板では大分不平を云ふものもあつたが仕方がない。船なりホテルなり、是非にも一夜を明さねばならぬ。

翌朝はまだ夜の明けぬ中から、葡萄酒で御座い。麥酒で御座い。と汽船の周圍に小船を漕ぎながら、物賣りに來る男や女の聲が聞えた。

自分はすつかり上陸の支度をした後、珈琲を啜り了つて、甲板へ出ると、時候は猶昨夜のまゝに寒い程涼しい。佛蘭西と云ふ處は此樣に寒い處かと妙な氣もする。空は曇つて夜深に小雨が降うたらしく、其の邊がまだ濕れて居る。自分は今一度明い日の光で市街の樣子や聞及ぶセーン河

の海へ流入る河口の景色を見たいと思つて居たが、甲板からは大きな倉庫と廣い鐵道の敷地に眼界を遮られて、僅に人家のちらばらして居る高い青い岡の一面を、遙か彼方に望み見るばかりであつた。

停車場は波止場から續いて居るので汽車へ乘込むには何の世話も無い。手革包を提げて廣い待合室を通り過ぎる時、草色に塗つてある單純な清洒な壁の色彩が金銀で塗立てる事の好きなアメリカの趣味とは非常な相違であると著しく自分の眼を牽いた。同時に、面白い薄色で、瑞西や南歐各地の風景を描いた鐵道會社の廣告が、此れまた自分の足を引止める――自分も遂にヨーロッパ大陸に足を踏入れたのだ。と云ふ感情が一際深くなつたからである。

汽笛と共に汽車は動き初めた。

ゾラの著作を讀んだ人は云はずとも知つて居やう。ル、アーヴルと巴里間の鐵道は殺人狂を描いた有名な其の小說人間の獸性 LA BÊTE HUMAINE の舞臺である。ゾラは荒涼寂寞又殺氣に滿ちたさまゞ〳〵な物凄い景色をば、此の鐵道の沿路から選んで居る。で自分は昨夜港に這入

つた時よりも一倍注意して、窓から首を出して居た。が、又も自分は失望――と云ふよりは意外の感に打たれねばならなかつた。

急行列車は鳥渡ルアンに停つたばかり四時間足らずで巴里に這入るまで、一箇所も其のやうな物凄い景色の中を通りはせぬ。成程稍長い隧道は五六箇所もあつたが、然し、北米大陸の廣漠無限の淋しい景色ばかりに馴れて居た自分の眼には、過ぎ行くノルマンデーの野の景色はまるで畫である。餘りに美しく整頓して居て、野生のものとは思はれぬ處がある。

例へば見渡す廣い麥畑の麥の黄金色に熟して居る間をば、細い小道の迂曲して行く工合と云ひ、已に收穫を終つた處には點々血の滴るが如く、眞赤な紅罌粟の花の咲いて居る樣子と云ひ、又は其の頂まで見事に耕されて、さま〳〵の野菜畠が樣々に色別して居る小山や岡の高低と云ひ、枯草を山のやうに積んだ二頭立の馬車が通つて行く路傍には、正しく列をなして直立してゐる白楊樹の木の姿と云ひ、或は、野牛が寢て居る水のほとりの夏木立と云ひ、其の位置其の色彩は多年自分が油繪に見て居た通りで、云はゞ美術の爲めに此の自然が誂へ向きに出來上つて居るとしか思はれない。其れが爲め「自然」其のものが美麗の極、已にクラシツクの類型になりすまして

居るやうで、却て個人隨意の空想を誘ふ餘地がないとまで思はれた。

汽車が巴里に近づくにつれて、鼠色の雨雲はすつかり西の方へと動いて行つて、青い青い夏の空が見え出したが、此の空の色が又アメリカの地では如何に晴れた日でも見る事の出來ぬ程青く澄んだ色である。此の空の色と日の光を得て、野の景色は一段と冴え〳〵して來る。自分は綠の木蔭に何れも同じ樣な赤い瓦屋根と鼠色した塗壁の人家を見る度々、あゝ、この國に住む人は何たる樂園の民であらうかと思つた。

遙か空のはづれ、白い夏雲の動くあたりに突然エイフェル塔が見えた。汽車の窓の下には青い一帶の河水が如何にも靜に流れて居る。その岸邊には繁つた木葉の重さに疲れたと云はぬばかり、夏の木立が默然と水の上に枝を垂れて居る。人が幾人も釣をして居る。鳥が鳴いて居る。流れは木の繁つた浮洲のやうな島に幾度か分れては又合する——自分は車中に掲示してある地圖によつて、これがセイヌ河であると想像した。

いよ〳〵汽車が巴里サンラザールの大停車場に到着しやうとする時、林の間に別莊の數多立續く郊外を過ぎる。皆富める人の住居であらう。清洒な家屋のバルコンから窓、又は整然として居

る花園の造り方思ひ〳〵に意匠を凝した處は、定めしそれ〴〵專門の名稱があるに違ひない。然し、自分は汽車の響に其の窓其の花園から、此方を見返る女の姿を見て此れまで讀んだ佛蘭西の劇や小說に現れて居る幾多の女主人公を思ひ出すばかりであつた。

サンラザールの停車場に着した。此の界隈は巴里中でも非常に雜沓する處で、掏盜兒の多い事は驚く程だ。時計でも紙入でも大切のものは何一ツ外側の衣囊へ入れて居てはいけないと、船中で或フランス人に注意されてゐたので、自分も其の氣でプラットフォームへ出たが、成程雜沓は爲て居るものゝ、然し其の度合は紐育の中央停車場なぞとは全で違ふ。人間が皆なゆつくりして居る。米國で見るやうな鋭い眼は一ツも輝いて居ない。後から旅の赤毛布を突飛して行く樣な無慈悲な男は一人も居ない。今プラットフォームから往來へと出て行く旅客の中では恐く自分が——出迎人も案內者もなく唯一人生れて初めて見る巴里の大都に入らうとする自分が一番早足に勇立つて歩いて行く男であつたにちがひない。

停車場の出口で制服をきたホテルの宿引が二三人、モツシュー〳〵と云つて名刺を出して見せ

たが、自分は構はずに出口前の廣場を通拔けて電車、辻馬車、乘合馬車なぞの込み合つて居る向うの街の方へと進んで行つた。何處か其の邊に安さうな宿屋があるだらうと思つたからで。

すると案の定ルユー、ド、ロームとして有る街の曲角に近く、見返れば今出て來た停車場の鼠色の大きな建物が時々しく一目に見える邊に、見付きの小さいホテルの入口があつた。PRIX MODERES（廉價）と書出してあるのが貧乏旅をするものには何よりの誘惑である。

進入ると傍の一室からボンジュール、モツシューと云つて、宿の內儀が出迎へた。酒樽のやうに肥つた大きなマダムで髮の毛は半ば白いが、身體と同じ樣に肥滿して居る頰は熟した林檎のやうに血色がよく、其の頤の横手には大きな黑い黑子があつて、其處から長い髯が生えて居る。よく雜誌や新聞の畫にある通りの女の手一ツで何も彼も切つて廻すと云ふ巴里の町の女房らしい。

——何處から被入ツた。さぞお疲れであらうなぞと、何處までも御世辭よく人をそらさない。自分は內儀が呼ぶ跛の下男に手革包を持たせて廣い螺旋形の梯子を上り三階の一室に案內された。

自分は然し二日より長くは巴里に滯在して居る事は出來ない。今度生活の道を求める爲めある銀行に雇はれた身は、一先づ急いで南の方里昂に赴かねばならぬ。何れ再遊の機會はあるとして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.